Contemporary Art Museum,Kumamoto (to open on 12th, October, 2002)

熊本市現代美術館発行

ART KISS LETTER

FOR KUMAMOTO ART PEOPLE Vol.9 2002.3.15

《武士》制作者、制作年不明、スティベルト博物館、フィレンツェ、イタリア ©Opera Museo Stibert, Firenze

文化講演会とパネル・ディスカッション

「松本喜三郎と生人形をめぐって」

東京都江戸東京博物館　小林淳一さん

熊本市現代美術館のプレイベント第8弾として、文化講演会とパネル・ディスカッション「松本喜三郎と生人形をめぐって」が開催されました。

第一部基調講演では『海を渡った生き人形』の著者で東京都江戸東京博物館の小林淳一さんに、文化交流史のうえで生人形の果たした役割を語っていただき、第二部パネル・ディスカッションでは、松本喜三郎顕彰会会長で島田美術館館長の島田真祐さん、熊本県立美術館美術専門員の高浜州賀子さんに、生人形をめぐる歴史的背景や、人形の構造など、様々な話をしていただきました。

小林淳一さん

島田真祐さん

高浜州賀子さん

松本喜三郎《武士》、1878年、スミソニアン博物館、アメリカ

©Smithsonian Institution, U.S.A

《頭部》制作者不明、1907年頃、ブレーメン海外博物館、ドイツ

© Übersee Museum Bremen

KISABURO MATSUMOTO

熊本市現代美術館では、現在、国内外で生人形の調査を進めております。すでに知られるアメリカ、スミソニアン自然史博物館の喜三郎の銘入りの男性像をはじめとして、ドレスデン民族学博物館の、１９１１年開催の第１回万国衛生博覧会で展示された家族の生人形、フィレンツェのスティベルト博物館の武士像、また、昨年の調査では、新資料としてドイツのブレーメン博物館で、子供から老婆までの60体を超える頭部を発見することが出来ました。熊本は松本喜三郎、そしてもう一人の生人形師安本亀八の生地でもあります。生人形の存在は、近代を読みかえす上でも貴重な文化遺産であり、熊本市現代美術館は現代の視点から埋もれた歴史を掘り起こすために、今後も生人形の調査を続けていきたいと思います。

《第1回ドレスデン万国衛生博覧会(1911)の日本パビリオン展示風景》(当時のカタログより転載)

©Staatliches Museum für Völkerkunde Dresden

2002.1.1～31のギャラリー展評

※もう、おわかりですよね！
熊本弁で「アート、どうか」の意です。

ART DE GYAN

アート・ド・ギャン

画廊喫茶ぷらうん

熊本市花畑1-2-15 ☎352-8855

● 「和田鈴子・三好勝二人展」（一・三～一・十五）陶板やアクセサリーなどの展示。

● 「九州美術研究所作品展」（一・十六～一・三一）岩下敬治さん指導の七人による作品展。（K・T）

四季の彩

熊本市上通4-10トラヤビル ☎351-8332

● 「四季の彩所蔵作品展」（一・四～一・三一）は、新春らしくアネモネや蘭、菊等の花々、席風景などの小品九点。いずれもママさんの趣味が反映された落ち着いた作品群。（A・S）

鶴屋百貨店

熊本市手取本町6-1 ☎355-2111

● 「青木邦雄　染織・絵画展」（一・二～一・八）

● 「ロバート・ハインテル展」（一・九～一・十五）

● 「現代名僧高僧墨蹟展」（一・十六～一・二二）鶴屋百貨店美術部が、日常生活の中で使い易い茶室の掛け物や法事用、節句用として、知名度の高い高僧の掛け物を展示即売したものである。高僧の墨蹟は技法を超越した「境涯の書」として、特に茶室で尊崇する。清水寺貫主・森清範さん、大徳寺貫主・小林太玄さん、相国寺管長・有馬頼底さん、法隆寺百二十七世・桝田秀山さん等が境地の高さを誇っているように見えた。（H・M）

熊本岩田屋六階美術画廊

熊本市桜町3-22 ☎322-1111

● 「新春お年玉入札会」（一・二～一・七）

● 「富士を描く画家連展」（一・八～一・十四）富士をモチーフに描かれた作品が並んだ。

● 「倉重栄二油絵展」（一・十五～一・二二）イタリアの古都の風景を描いた油彩の作品展。暖かな光が印象的だった。

● 「備前焼発作展」（一・二二～一・二八）が開催された。水玉模様のような斑紋が浮き出た、木村素静さんの（区切り旅枕掛花入）など、佳作が数多く展示された。（K・K）

● 「野口明美銅版画展」（一・二九～二・四）パリのメトロ（地下鉄）をテーマにした連作。シンプルな線でとらえた列車や人々と、その駅を象徴するイメージの対比が洗練された雰囲気を醸す。駅それぞれのストーリーが思い浮かぶ。（A・S）

ギャラリー萌

熊本市水前寺6-27-20 ☎383-7001

● 「川上直子作品展」（一・四～一・三一）は、浅間山、遠野など、川上さんが日本各地で出会った風景の油絵十数点。的確な構図と描写にその本領が発揮されている。キャプションには場所にちなんだ古事や短歌が添えられ、旅情をかきたてられる。（A・S）

ギャラリーカフェ　ブリランテ

熊本市桜木2-14-5 ☎369-0095

● 「緒方弘之写真展」（一・四～一・十六）。三〇年来阿蘇を撮り続けてきた緒方さん。今年の干支「馬」をテーマに、かねてから取り組んできたというデジタルプリントでの発表。銀板にも引けをとらない質感の豊かさに驚かされる。阿蘇の清明な大気、草の緑、馬の毛色の対比が美しい。（A・S）

● 「柏原妙子遺作展」（一・十七～一・三一）は、故人の友人によって企画された。コスモスの柔らかな花びらが、深い緑色の背景に溶け込んでいくようで、柏原さんの人柄が偲ばれる。（Y・H）

柏原妙子さんの作品

熊本県伝統工芸館

熊本市手取本町3-35 ☎324-4930

● 「木目込み人形「桃の節句・端午の節句」展」（一・八～一・十四）

● 「府礼森展」（一・八～一・十四）の作品展。

● 「幻雅　焼き締の音展」（一・八～一・十四）政岡　紳さんの作品展。

● 「陶・酒・徒2001人吉クラフトパーク陶芸館いと怪しげな仲間達展」（一・十六～一・二〇）

● 「森野雅也・大田敦之二人展」（一・十六～一・二〇）備前焼き初展。

● 「ニマ　"アジアの自然と暮らす"展～手織布と藍と雑貨と～」（一・十六～一・二〇）

● 「シルクロード遊牧民の草木染　絹糸・キリム展」（一・十六～一・二〇）

● 「藍の工芸展」（一・二二～一・二七）

● 「二代西頭哲三郎博多人形作品展」（一・二二～一・二七）

● 「友枝敬作陶展」（一・二二～一・二七）

● 「緋・陶・焼・硝・藍～暮らしに自然との対話を～」（一・二九～二・三）

● 「池田和眉作陶展」（一・二九～二・三）形面白く絵もうまい魅力ある作品群。

● 「現代の友禅二人展」（一・二九～二・三）日本工芸会監事地沢朔苾さん・日本工芸会会員地沢啓成さん、両氏によるシックな和装。（K・T）

● 「ハイマートサロン・ユーリカ創立一〇周年記念展示会」（一・三〇～二・三）

島田美術館ギャラリー&島田美術館蔵寸館版

熊本市島崎4-5-28 ☎352-4597

● 「くつろぎの家具展―桃村時生」（一・六～一・一五）

ギャラリーレストラン芳文

熊本市黒髪江5-7-76 ☎311-3344

● 「押し花展」（一・九～一・十五）は、芳文の古い蔵を利用した展示空間と、押し花のアンティークな雰囲気がぴったりの、素敵な展覧会だった。

● 「菊川英津子・磯部美代子二人展」（一・十七～一・三〇）清冽な色彩で花を描く菊川英津子さんと、確かな画力で渓谷の風物や身の回りのものなどを丁寧に捉える、磯部美代子さんの二人展。（K・K）

上通郵便局プラザU

熊本市水道町3-37-1F ☎326-4123

● 「友枝雄策デザインスクール二〇〇二カレンダー展」（一・四～一・七）デザインスクールの学生によるカレンダーの展覧会。上田奈穂子さんの都市図を思わせるペン画の作品など、それぞれの個性が光っていた。

● 「第五回県下高校生写生大会優秀作品展」（一・九～一・十五）昨年一〇月八日に熊本市動植物園で行われた写生大会で、提出された二二二点の中から選ばれた特選三六点を展示。くじゃくを描き、構図の面白さが目を引く第二高校二年の西坂宗英さんの作品、庭園を繊細な緑のパリエーションで表現した、熊本信愛女学院高校二年の清田愛代さんの作品など、力作そろいだった。（K・K）

● 「「新春に遊ぶ」青玄社選抜書作展」（一・十六～一・二二）青玄社長上村方峯さんをはじめ、役員二〇名が新春の歌を「かな」で二〇点展示。上村さんは楮紙に墨流しで加工した約四〇年前の古紙に古今和歌集を漉墨でかき、赤星青汀さんは三十六歌仙、木上方草さんは簡素集の一首をしたためている。いずれも手なれた用筆で、春らしくあでやかに表具も工夫されている。（S・K）

● 「NHK熊本文化センター日本画木蘭会展」（一・二三～一・二九）十七人による日本画の展覧会。この会では講師の西村淳さんの指導の下、主に植物写生から日本画を学んでいる。それぞれ、花が語りかけてくるような、生き生きとした作品。（K・K）

県立図書館

熊本市出水2-5-1 ☎384-5000

● 「楽しい絵本展」（一・二二～二・一一）は、熊本県立図書館が毎年行っている展覧会で、今年のテーマは「魔法使いになりたいと思ったことはありませんか？」。魔法使いが出てくる絵本を中心に「ひまわり文庫」制作の「布の絵本」や、尚絅高等学校で美術の時間を利用して制作されている「手作り絵本」も展示されていて、とても明るい雰囲気の中で絵本を楽しめるように工夫されていた。（E・Z）

喫茶りんどう

本市水前寺2-18-1 熊本庁舎第1F ☎383-1111（内線5459）

● 「ぬくもりのある陶器　天草の苓雨窯展」（一・四～一・三一）身体障害者授産施設苓雨窯の焼物の展示。（K・T）

スペースレインボー

熊本市新市街10-7（シャワー通り） ☎324-0387

● 「島田有子・高光俊信　共同作業　写真＋金属展」（一・十三～一・二七）は、スペースレインボーの企画展。写真家の島田有子さんと、デザイナーの高光俊信さんの「共同作業」。「コラボレーションというふうに構えたくなかった」という二人の展示は、高光さんの鉄の展示台がダイナミックに空間を構成し、島田さんの写真世界を確かに支えていた。鉄は時に格子となって写真の上に重なり、展示台の領域を逸脱するが、写真の存在感を揺ねることはない。（K・K）

↑共同作業　写真＋金属展＞展示風景

● 「JUMPING　HEARTS展」（一・三〇～二・四）

熊本県立美術館本館・分館

熊本市千葉城町2・18 ☎351・8411

● 「四〇回記念世代展」（一・五～一・二〇）記念すべき四〇回目。一堂に最新作、続いて現在に至るまでの作風の変化を振り返れる作品が並ぶ。各々攻撃的なまでに個性的だが、色使やマッスへのこだわりなどに、共通の目的が見出せる。作品の底辺にとうとうと流れる、「日々前進」の情熱に脱帽。

● 「東光会一〇人展」（一・五～一・十四）人物、静物、風景を具象的に表現する東光会の展示。力のこもった大作が並ぶ。小本優美子さんの《静物》は、花の咲き誇る華やかな様子を力強く描き出していた。

小本優美子さんの作品《静物》

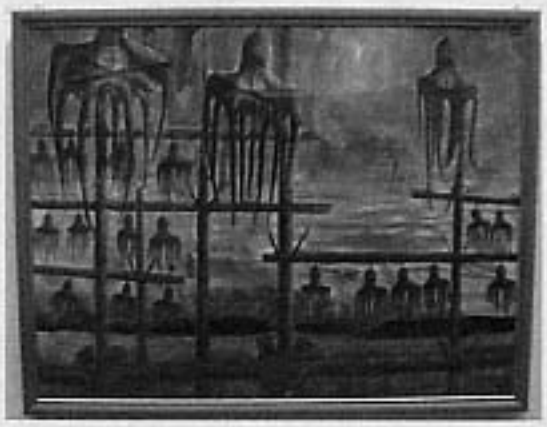
● 「第二一回ぐるーぷ・二彩展」（一・十六～一・二〇）実践の家族の集まり、現やかな異国の風景など、人生における大切な思い出の一頁を、色あざやかに再現したかのような作品が並ぶ。（H・T）

本山正喜さんの作品《夢想》の為のエスキース

● 「第三七回県高校書道展」（一・二二～一・二七）県高校文化連盟書道部と、県高校教育研究会書道部会の主催の書道展。県内四五校から古典の臨書と創作の二一八点が展示された。作品は、色紙から二×八尺の大作まで多彩である。生活の中から創作された楽しい作品が、生き生きと会場に満ちあふれていた。特に近年、高校書道作品に活気と熱情が高まってきたのがよくわかる展覧である。（S・K）

● 「『へちま』俳画展」（一・二二～一・二七）

● 「第二四回水彩連盟・熊本支部展」（一・二九～二・三）大きな画面に風景、人物等を具象で表現。なかなか力作が多く、松田緑さんはタコ干しの風景を描くが、空にもタコに用いた色を反復して用いて画面を落ち着かせて、飯星喜美子さんの風景も作者と自然とのつながりを確信させる作品に仕上がっていた。（H・T）



松田緑さんの作品《海風の中》

● 「全国書団連選抜臨書展」（一・二九～二・三）全国書道団体連合会九州総局の主催で、日中両国歴代の書の名作の臨書のみを並べた展覧会である。臨書は作品かという論議もあるが、この会では伝統の重みを再認識しようと古典学習を重視している。臨書と言ってもレベルは高く、写実的なものから斬新な創意や独自の感性をきらめかすものまで幅広く楽しめる。（H・M）

ジェイ

熊本市大江本町6・9（味噌天神電停前） ☎372・8732

● 「木版画虹の会年賀状展」（一・三～一・一〇）

● 「水墨画四川会第二部有志展」（一・十一～一・十九）

● 「宗像欧州渡仏（南フランス）作品展」（一・二一～一・三一）は、躍動感あふれるタッチで、風を感じさせる明るい作品の展覧。（Y・H）

武倉敏男さんの作品

アートスペース大宝堂

熊本市上通6・6 ☎354・2155

● 「第五四回新春創光会熊本支部展」（一・三～一・十四）八〇～一〇〇号サイズの大作から鉛筆画まで、具象の作品が並ぶ。色彩にこだわる人、絵肌にこだわる人、作品の物語性にこだわる人など、おのおのの世界の完成に力を注ぐ姿が感じられた。

竹川健一郎さんの作品《水鮮・桜川》

● 「原画展『子どもの権利を買わないでーブンとミーチャのものがたり』展」（一・十五～一・二二）ユニセフによる「こどもの権利」のためのキャンペーン展示。絵本の原画展というかたちで幅広い年齢層に訴える。

● 「土野精二個展」（一・二三～一・二八）スペインで八年間を過ごしたのは、「絵の中にこもる浄気を取り除きたかったため」と語る土野さん。ゴヤの作品に漂う悲しくも陽気な雰囲気を自らのものにしたいと、絵の道をひたすらに進んで四〇年を迎えたとのこと。まず、大地を見つめ、そして空を見つめ、その間で生きる人間を見つめる準備が整ったようだ。ひまわりシリーズののち、どのような世界が見出されるか楽しみである。（H・T）

土野精二さん

ギャラリーキムラ

熊本市水道町3・5（上通KビルBF） ☎327・0166

● 「松山サダ子『ドローイング展』」（一・六～一・十三）エスキスとして二年間描きためたドローイング。「女」を知るものが描いた、「女」の姿。大胆であり、強くもやさしくもあり。

● 「『絵画サロン』講座生の作品展」（一・十四～一・十九）オーナーの木村登美子さんが指導するグループの作品展。木村さん自身も、初めて筆を取ったおばあさまの心のなかに広がる、世界の美しさに驚かされることもあると語る。楽しんで丁寧に描いた作品が並ぶ。

● 「木下悠紀子作品展」（一・二一～一・二七）自在に動く植物、蝶々、クモを丁寧に綿密に彫り込んだ版画。コスモスなど茎の組いかよわげな花が、牧の幻想の世界を元気に飾る。（H・T）

画廊喫茶三点鐘

熊本市手取本町3・8有明ビル ☎326・3040

● 「第一回墨彩画展」（一・三～一・十九）井上春節さん、川上清泉さん、杉本安弘さんはじめ一〇名の書家が軸や額三〇点を展示。井上さんは《鈴蘭》や、竹久夢二のような水墨画を五点。川上さんはお孫さんや風景の水墨画五点。杉元さんは甲骨文字の《馬》など三点で、作品はわかりやすく、親しみやすい画面で、楽しい会場となっている。（S・K）

● 「古稀を記念して　二人の絵手紙展」（一・二〇～一・三一）は、同じ先生に学ぶ、竹下恵美子さんと井村繁子さんによる初めての展覧会。日常の世界を静かに見つめている姿が捉え、好感が持てた。（Y・H）

竹下恵美子さんと井村繁子さん

画廊喫茶南風堂

熊本市北千反畑町6・13有明ビル1F ☎343・9664

● 「のぞみ（絵美）書展」（一・四～一・一〇）元熊本大学教授の森山淡草さんの指導するサークルで、会員十九名が小品を額装で展示。作品は《恵無彩》や《彩》など行草書や、篆書、隷書、かなもあり、バラエティに富んでいる。文字と額装がよくマッチして、明るく素直な作品で、楽しい会場となっている。森山さんも金文の《徳》を特別出品。（S・K）

● 「日本書春丘社新春展」（一・十一～一・二〇）

● 「阿蘇を描く展」（一・二一～一・三一）は、貞下で活躍する作家十四名による「阿蘇」。熊本の「宝物」も季節、詩興、場所、描き手によって多彩な表情をみせる。作家それぞれの個性が光り、見ごたえのある好企画だった。（A・S）

■大小各種取り扱。様々な展覧会や催物をとり上げていきます。どしどし準備期まで案内ください。（編集部一同）

■美術館や作品を飾っているレストランやカフェバー、商店等をお知らせください。紙面で紹介いたします。

■いけばなの展覧会情報もお寄せください。学生課題展覧会も掲載いたします。

ヒロ・デザイン専門学校校長

出田　宏さん

Hiro Ideta

SUITOTTO*KUMAMOTO

連続インタビュー　NO.8

この連載では、熊本にお住まいで、様々なジャンルで活躍されている方々に、活動によせる熱い思いを語っていただきます。第8回目は熊本のファッション・シーンを支える出田宏さんに楽しいお話を聞きました。

略歴／文化女子短期大学服装学科卒業。現在、ヒロ・デザイン専門学校校長、全国服装学校協会熊本県支部長、熊本ファッション協会副会長。

――ファッション・デザインの道を志したきっかけから教えて下さい。

出田：高校生時代はファッションなんていう言葉は、ごく一部の時代で、腰に手拭いを下げ、下駄をひっかけて自転車をこぐ、バンカラ女子高生（笑）。大学も工学部に進学するつもりが、父親に反対されてしょげていた時、洋裁学校を経営していた伯母が「服飾もおもしろいわよ」って勧めてくれたんです。最初は抵抗もありましたけど、東京に行けるならと思ったんですね、服飾学科に進学することになったんです。

――バンカラから「服飾」、「ファッション」へと、すぐに順染めましたか？

出田：それがどうしてどうして、「服飾」はすごいと思ったんです。何もない「無」から創造し、自分の身を飾る動物って、地球上、人間しかいないでしょ。ファッションというのは、自分の思想や信条をあらわす哲学のことだったんですね。理論から入ったのが性に合ったのか、その深さに引き込まれていったんです。

――先生が学ばれたころから、服飾教育はどのような変遷をたどって来たのですか。

出田：昭和20、30年代の頃、洋裁技術は女性の嫁入り支度のひとつでもあり、女性の後期高等教育として位置付けられました。そして、既製服に満足しない人たちが技術を自分で身につけたいと、洋裁ブームが起きたんです。服飾専門学校の生徒数がピークを迎えたのもそのころで、その後、高度成長期を迎え、女性が社会に進出する中、既製服のレベルが上がるにつれ、今度は逆に洋裁学校が減少する傾向を見せ始めます。それで昭和50年代に教育制度が変り、専修学校制となると、また淘汰が起きるんですね。その後60年代は60年代でコンピューター学校や、短大などへの進学率が上がり、ファッションを志す学生が拡散していきました。それがバブル期にファッションが一番の花形ビジネスとなり、作り手より、特にアパレル・ビジネスを志す人が一気に増えることになったんです。今でも学生の90パーセント以上がアパレル関係に就職を希望しています。私の学校も平成元年に学校法人として認可をいただき（学校そのものの認可は昭和25年）、校舎も新しくして、ファッションのプロ養成を目指すようになりました。

――熊本は「ファッションの街」といわれました。今の状況はどうなのですか。

出田：新しい物好きの「（早生物）わさもん」という熊本の気質が関係していたのかもしれません。九州でも一番古い、明治期から続く老舗の洋装店もありますし。バブル期はまず熊本にアンテナ・ショップを出してから、全国展開していたほど、日本のファッションの流行の流れを決めていた街だったんです。「ポール・スミス」も熊本から火がついたんですよ。シャワー通りも、ちょっと前までは豆屋さんなどが並ぶ通りだったのですが、軒並みファッションビルに変ったのもそのころです。でもそういう反面、衣服にこだわるなんて「あそび」だと考える、ファッションを文化と認めない、変な「もっこす」の人たちもまだいるんですよ（笑）。熊本の若い人たちのファッションへの関心はいまでもすごいし、消費もあるんです。でも情報を発信するということにおいて、残念ながらすこし元気がなくなっているかなという感じがします。

――服飾教育に人生をかけてきた先生から、若い人たちへのメッセージをお願いします。

出田：何よりも、熊本でファッションを学ぶ良さは、ギスギスしない、自然の豊かなところで、ゆったりと勉強できること。競争心が薄れてしまうのは難点ですが（笑）。そして、私は戦争を体験している時代の人間ですから、学生にいつもいうのは、平和で、豊かであってこそのファッションであり、人類愛あって初めて、ファッションが成立するということなんです。ただ自分の欲望を満たすだけのものではなく、ファッションを通して、世の中に何か貢献していくというビジョンを持ちながら、他人に対する深い思いやりの心を表現できるよう、熊本から大きく羽ばたいていってもらいたいと思っています。

――ありがとうございました。

（3月1日、於：ヒロ・デザイン専門学校、聞き手：南島　宏）

編　集　後　記

ヒロ・デザイン専門学校の卒業ファッションショーに行ってきました。かつて、といったら比られるかもしれませんが、特に80年代後半から90年代にかけて、熊本は日本のファッションの指針を決定する街でもありました。バブル経済が破綻し、日本全体が疲弊する中、そうした状況に変化が起きることも致し方ないことかもしれません。しかし、さまざまな形でファッション界に関わりたいという、それぞれの覚悟の表れとして、次から次へと繰り出されるユニークなスタイリングやデザインの数々、そして学生たちの熱演に、熊本市現代美術館は彼らの才能を応援する美術館でなければならないと、勇気づけられた次第です。ちなみに私は熊本に来る前、15分も歩けばセンター街や竹下通りというところに住んでいました。下通を行く若者たちのファッション感覚の豊かさは、東京にまったく負けてません。大切なことは彼らの才能をどうすくい上げるか、その責任の一端が私たちにもあるということなのです。

（学芸課長　南島　宏）

発行元／ART KISS LETTER　アート・キッス・レター Vol.9　2002年3月15日発行／無料
編集人／田中　平人
編集長／南島　宏　　担当／富澤　治子
印　刷／熊本県印刷センター協業組合　　デザイン／松永　社デザイン事務所
発　行／熊本市美術館設立準備室　〒860-8601　熊本市手取本町1-1
TEL.096-328-2747　FAX.096-359-7892

［お詫び］　先月号の「ART DE GYAN」で森田のぞみさんのお名前が間違っておりました。お詫びいたします。

寄稿者紹介

兼城 昌山 (S.K)
Shozan Kaneshiro
「苦しいけど、たゆまなく続えることを継続することが大切である。」とマリナーズのイチローが言う。ほんとだ。

森山 淡草 (T.M)
Tansо Moriyama
現玉名市岱尾出身で、江戸後期に京都を中心に活躍した儒者・西依成斎の書の特別展に招かれた。これまで関心を抱いた書風ではなかったにもかかわらず、九十五、六歳の最晩年の書にいたく感動して打ち付けにされてしまった。これはただ者ではない、こうありたいという生きざまを見せてもらった。

田代 晃三 (K.T)
Kozo Tashiro
ただの写生では絵として面白くないというが、自然が教えてくれる調子は規範と思う。

学芸員紹介

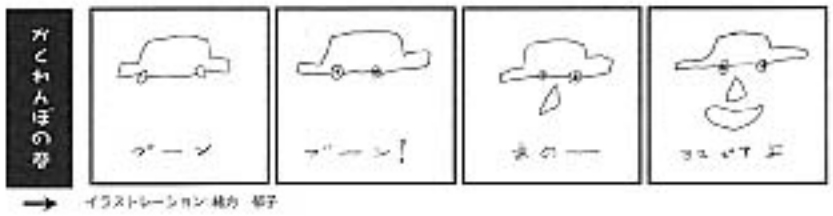
本田 代志子 (Y.H)
松本清三郎記念館は多くの方にお越し頂き、生人形への関心の高まりを強く感じました。

蔵座 江美 (E.Z)
沈丁花の香りが漂いはじめました。卒業式の香りがします。

金澤 韻 (K.K)
大学の金属工学の先生と知り合いました。違うフィールドで活躍される方のお話は、とても刺激になります。

坂本 顕子 (A.S)
いよいよ美術館への引越しです。熊本城の見事な桜が窓から見えなくなるのが少し残念です。

富澤 治子 (H.T)
日に日に暖かくなる今日この頃、皆さん、春のスケッチ旅行の準備は整いましたか？



→　イラストレーション 桃力　郁子